
メロディ・ライン

坂井悠二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロディ・ライン

【著者名】

坂井悠一

N6298H

【あらすじ】

高校一年生の少年が出会う、バイオリンの旋律

メロディ・ライン 坂井 悠一

僕がその高校に入ったのに特に理由はなかった。

ただ家に近く、成績も悪い方ではなかつたし選り好みしなければ入
れた、というだけだ。

勿論最初の内こそ慣れなかつたがそこは人間、いつの間にか日常に
組み込んでしまう。だから僕が放課後にふらふらと校舎を歩いていたのも、特に理由が
在つての事じやなかつた。

でもそこで僕には聞こえてしまつた。忘れる事の無い、美しいバイ
オリンの旋律が。

僕の父は物心つく前には亡くなつていた。顔もろくに覚えていない
人の死を悲しむほど情愛深い人間でも僕はなかつたし、とか言つて
全く気にしない程無神經でもない。辛い思いだつて高校生になるま
でに一杯してきた。それでも母と一人でなんとか暮らして来れだし、
これからもそうするつもりだ。この年代の友達なんて大体考えてい
るのは色恋沙汰に学校の退屈さと遊びに行く事くらいのものだろう。
そうじやない人も勿論居るのだろうけど、少なくとも僕の周りはそ
う見えた。彼らが羨ましく映る事も、ちょっと、あつたけど。

その日僕はバイトも無く、ホームルームが終わつた後にゆつくりと

帰宅の準備をしていた。

季節は初夏。白いワイシャツが青い空に光り、緑が青々と茂り始めていた。グラウンドからは運動部の威勢の良い声が聞こえ、隣の校舎からは吹奏楽の音が鳴り響く。

鞄に教科書を詰め終わり、忘れ物が無いか確認する。帰ろうとした時に声をかけられた。

「なあ、このプリント数学の斎藤先生に出しておいてくれないか」

見るとクラスの友人だった。どうやら部活の用事で急ぎらしい。サンカーネーションのユニフォーム姿で頼んでくる彼に対し断る理由も無いし、僕には用事もなかつたので承諾しておく。

「分かった。提出しておくれよ」

彼は「サンキュー」とだけ言い足早に駆けて行った。高校に入つてもう一ヶ月経つけど頼まれ事はけつこう頻繁だ。皆何故か僕に頼んでくるし、僕もそれを引き受ける。委員会の役員を決める時だってそうだった。バイトをするつもりだったからあまり忙しい委員は止めておこうと思ったのに、会議が終わってみたら図書委員と保健委員のダブルパンチだ。見た目だって中の下くらい（染めても無いショートの黒髪、背だって高い方じゃないし地味という言葉が合うと自分で思う）学級委員なんて花形委員は似合わない。案の定これから学校生活で目立ちたいであろうとの思惑である奴がやつていたように思つ。

そんな日々をつづつしたいと思つ程ではなかつたけど、少々窮屈に感じていたのも事実だつた。

だから最初に言つたけど、プリントを数学の斎藤先生に提出した後

なんだか校舎をぶらつきたくなつたのも、ちょっとでも自由に動いてみたいと思つてそれ以外特に理由なんて無かつたんだ。

「・・・ん？」

職員棟の一階まで来て、綺麗な音色が耳に入つてくる。なんだろう、誰か演奏しているのだろうか。そう思い音のする方へ歩いて行く。音楽室から音は聞こえていた。音楽の授業で何回か行つた事があつたがそれ以外で行つたことなんてない場所だ。

ドアを開けてみる。いつも授業をやつている部屋だが誰も居ない。部屋の右奥にまた扉が在つて半開きだった。練習室があるらしい。扉の傍に寄つて近寄つて覗いてみた。

「あ・・・」

先輩らしき女生徒がバイオリン（多分そつだと思つ）を肩に乗せて弾いていた。激しく凛々しく、それでいて優雅に。演奏に夢中になつてゐるらしく横から覗いている僕には気づいてないらしい。彼女が音を奏でる度に背中まである黒い髪が揺れる。且はまつすぐ弦を見ていて手は素早く弓を動かしていた。ちょっとだけ見惚れたのは認めよう。それくらいの神々しさはあつたかもしれないのだから。

しかしその後がまづかった。見てゐるあまり曲が終わる事なんて考

えもしなかつたのだ。

ゆっくりと彼女が動かす手を止めた後に、僕は我に帰った。

「見物料1000円」

いきなりそれだ。はつきりとした声で剃刀のように鋭く。

「はい？」

「今見てたでしょ。私の演奏で1000円。大特価でしょ」

いやあの・・・ちよつと音が聞こえて見にきただけなんんですけど

こちにすんずん歩いてきたまつ白いワイシャツを卒なく着こなし
た彼女はじつとこちらを見る。そこではつきりと僕はこの人の顔を
見た。黒く長い艶々な髪に澄んだ目と長いまつげ、薄化粧な白い肌。
背はけつこう高いし大人びて見える。だが見た目と中身は得てして
違うものだつたりする。

「君、名前は？」

「一年生の美鞍です。美鞍和義」

「ミクラ君か。私は一年の安達凜子。凜子で良いわよ」

・・・何が良いんだりつ。とりあえず頭を下げて音楽室を出ようとしました。

「待ちなさい。お金無いならアナタ、弦楽部に入部しない？」

「ええ！？いや楽譜も読めないんですけど・・・」

「そんなもの直ぐ読めるようになる。強制入部。でなければ1000円」

今思えばそこ1000円払っても良かつたかもしれない。ただ、なんだかこの先輩におすおすと1000円渡すくらいなら入部してやるという考えが勝ってしまった。なんというスピーデ入部。昔から女性に逆らうなというセーフティが掛っているのかかもしれない。少し間を置いて、溜息をついた。

「・・・わかりましたよ。入部します。ただし、何にも出来ませんよ」

「問題無し。これから技術をみっちり叩きこんであげる」

「・・・お手柔らかにお願いします」

先輩が持つてきたバイオリン（なぜか一つ持つているらしい）でそれからみつちりと凛子先輩の指導が始まった。基本姿勢は顎と肩でバイオリンを支えて左手での維持は最小限にすること、右手で弓を操作することをボウイングと言つてこれが音色を左右すること、運指の仕方すなわち弦の押さえ方・・・なぜここまで成り行きとはいえ練習しているのか自分でもよく分からなかつた。バイトも委員会もあるのに続いた音楽室でのレッスンは日常とはどこか違つたように思えた。勿論そんなすぐ弾けるようにならないし、疲れて集中も出来ない日がある。そんな時はなんとも話を振つてみたりし

た。

「IJKの部には先輩しか居ないんですか」

「やつ。みんな三年生が卒業しちゃつた。残つたのは私だけ

「何で潰れないとしよう」

「さあ?私が眞面目に練習してるからじゃない?」

「…………。とこいつが何で先輩は残つたんですか」

「タダで練習できる部屋があるからに決まってるじやん

「せうですか。あ、演奏会みたいのつてありますよね?」

「せつかく練習してるんだから発表しなきゃ勿体無いじゃない。と言つても初秋の文化祭のまではお預けね

なんてこいつた。こべらちゅくちゅく練習してるのは言え楽譜のおたまじやくしが音符として見えてきたのも最近だとこいつのこ。同級生の前で恥かけとこいつのか。無駄だと思つたが反論してみた。

「いやまだそんな技量ないんですねナビ……

「夏休み返上。どうせ一年生の夏休みなんて暇でしょう」

・・・やれやれと言こなつたが、口の中で我慢する。ひとつやら演奏会出演は当然、のやつだ。ふと時計を見る。五時。まだ明るいな。

もう一回左手の置き方を確認して、『きいちなく』を動かしていった。

練習が終わった後、たまに先輩と帰る事が有った。同級生の中では俺が部員一人の零細弦楽部に入ったのを知ってる奴も居て、けつこう冷やかされたり羨ましがられたり演奏してくれとせがまれたりするのだが、冷やかされる事なんて大抵凛子先輩との事だった。でも別に何でもない事を話して、互いに家路に着くだけだつたし、凛子先輩はどんな家庭でどんな人間でどんな理由があつてバイオリンを弾いてるのかなんて全く聞かなかつた。多分聞いても教えてくれないだろうし、隠したい事なんて人なんだからあるに決まつて。だから無理に突つ込む必要なんてないし、いつか話してくれるかも、と勝手に考えたりした。

母親は弦楽部に入った僕を芳しく思つてくれていたのだろうか、「今まで色々な所で苦労ばかりさせてきたし」とか「打ち込む事が見つかつて良かつた」とか「今度その先輩お母さんに紹介しなさい」とかいつも話していた。そんな事を言つ母の顔は決まって心から嬉しそうだったので、僕自身も安心させられて良かつた、ちょっとだけ凛子先輩に感謝しないとなと思つたのだけど今はまだそう言つべきじゃない気がした。

真夏になつても先輩との練習は続いた。バイトに行く日以外は殆どやっていた気がする。その甲斐あつて練習曲程度ならゆつくりと弾けるようになつてから、夏休み直前の放課後に凛子先輩はいきなり言いだした。

「ミクラ君。あなた『耳をすませば』って見たことある?」

「ええ、まあ。・・・バイオリン弾きが居ましたね。いやバイオリン職人かな」

「そうね。私あの映画大好きなのよ。主人公のヒロインのように物語は書けないけれど」

「意外にも乙女的な要素あるんですね」

「意外は余計。あの映画の中で使われてた曲を演奏してみたりどう？」

「下手にクラシックやらなんやらより良いかもせんね。知ってる曲の方が良いですし？」

「じゃあそれにしましょっ」

若干抵抗が無かつたと言えば嘘になる。しかしあの映画は僕もどちらかと言えば好きだった。・・・あのバイオリン職人の中学生より熱意があるかは分からぬが。

夏休みはバイトと練習の繰り返しで順調に過ぎていき、あつという間にまた学校が始まった。文化祭は2週間後。練習にも身が入つてくる。夏休みが始まつてからなのだが、凛子先輩は時々遠くを見ている事が多いように見えた。どうしたんだろう、いつもなら五月蠅い程にああしなさいこうしなさい言い訳してる暇あつたら練習しうみたいな感じであったのだけど。

「先輩は演奏しないんですか」

練習前の放課後に突然に聞いてみた。ずっと疑問だったが聞くに聞けなかつた事だ。

「私は、出来ない」

先輩は寂そつな顔になつて床を見つめる。全く訳がわからない。

「どうして？」

「・・・とにかく、出来ないの。御免なさい」

正直この先輩から謝られたなんて無かつた事なので、それ以上追及するなんて出来なかつた。場の空気が重くなる。ただ聞いてみただけですから気にしないでください、とだけ言つて練習を始めた。外ではまだまだ、蝉が五月蠅く鳴いていた。

残暑が続く文化祭当日。僕は凛子先輩の姿が見当たらない事に気づいた。

昨日までは居たのに。何故だ、あれだけやらせようとしていたのに見に来ないなんて酷いじゃないか。携帯に連絡してみたが電源が切れられていた。

時間が迫つてくる。僕はたつた一曲の演奏曲を頭の中に刻みつけていた。

体育館での即席で出来たステージ。音を増幅させるマイクも置いてある。

「じゃあ、美鞍君。君の出番だよ」

そつ実行委員に言われステージに歩み出る。満員とは言えないがそこそこに客は居る。

どこかで見ていろ事を祈るよつて僕は演奏を始めた。

少しづわつこっていた観客はすぐに静かになつた。僕の音しか聞こえない。持ち曲が一曲しかないのゆつくり弾く事にした。弾いている内にあの映画を思い出す。ああ、あの中学生は最後にどうしただろう？確かにこの文を物語書きの少女にぶつけたのではなかつたか。まつすぐだ、まつすぐ過ぎだ。でも僕もまつすぐに練習してきたのではないか。

ミスをしないように時々演奏にも意識を配りながら、緊張も心の端で感じながら、ここ半年の事も思い出す。先輩の演奏・・・そう言えば見たのは後にも先にも一回きりか、いやこれから会えなくなるみたいな言い方じやないか、どこかで見てくれてるさ。練習きつかつたけど、最初はおたまじやくしの集まりにしか見えなかつた楽譜も、人並みにも読めるようになつたかな。先輩はどうしてこの舞台で弾けないんだ、本来僕なんかより先輩が弾くべきなんだなんて考えていたら押さえる弦を間違えそうになつた。

最後の一小節が終わる。僕は目を閉じる。ゆつくりと音色が・・・
・消えた。

スタンディングオベーションとはいかないけど十分過ぎるくらいの拍手。とても気持ち良かつた。凜子先輩の姿を目で探した。でも、

「でも見当たらなかつた。

外の風に当たりたくて体育館を出ると、先輩にバイオリン返さなあや、と思つ。ずっと借りっぱなしになつた。でもどうにいふんだ? とこりか見に来てくれたのか?

校舎を探して回つてみよつ、と思つた矢先に聞き覚えのある声が聞こえた

「素晴らしい演奏だつたね、ミクラ君」

後ろから唐突に声を掛けられて、すぐに振り向く。私服姿の凛子先輩が立つていた。なんで私服なんだろう、文化祭であるいつなんだろ? と生徒は制服着用なのだが。

「エリ行ってたんですねか! 演奏終わっちゃいましたよ」

「大丈夫、見てたよ、ちゃんと」

「へだつて先輩居なかつたじゃないですか」

「一番近いところですね。でももつ見れないかな

……嫌な予感がした。いつこう予感に鋭くても良い事なんてない。

「……どこか行つちゃうんですけど、遠いところへく

「うん、エリよつずつと、遠いところへく」

「するいですよ。勝手に入部させといて。あ、バイオリン返します。
ちよつと待つ」「ああ、良いよあれば。君にあげる」

さらりと言った先輩の口は少しだけ悲しそうに見えた。演奏は映画のように上手くいつても、ストーリーは映画のようにならないか、やつぱり。それでもいきなり居なくなるなんて、しかもバイオリンをまるで形見のようにあげるなんて、納得いかない。

「いつもの事ですけど説明してくれないんですね。・・・まあ聞く聞けないなんて割り切ってた僕も悪いんですけど」

「本当にじめんね。ただ、これだけは言える。何処に行つてもバイオリンは続けたい」

「・・・だつたら文化祭でやれば良かつたじゃないですか」

「・・・。私の代わりに君がやつてくれたじゃない。それだけで十分」

そう言って頑張つて笑う先輩見てると何も言ひ残がなくなつてくれる。ただただ、重い空気が圧し掛かってくる。ふと思ついたように先輩は言った。

「ミクラ君、自転車通学だったよね。私乗せてつよ」

「・・・でいいですか」

「駅まで。ダメかな?」

「ちよつと待つててください」

そう言つて僕は自転車を取りに行つた。なるべく早足で。早く戻らないと、先輩が居なくなる気がしてしようがなかつたからだ。きっと今の僕は子犬のような目をしてたかもしれない。捨てられた、つてやつ。それともセンチメンタルになり過ぎているのだろうか。

戻つてみるとまだ先輩は居た。一息ついて、僕らはゆつくじと正門まで、歩きだした。

「懐かしいねえ、あの映画のシーンみたい」

「重くてペダルが漕ぎきりこんですが」「

「殴るわよ」

「痛つ、ホントに殴らないでくださいよ。しかもグード」

「そういう事言つからモテないのね。冷静を装つてゐくせに」

「別に装つてなんかいません。そつなうざるを得ない環境だつたん
です」

「ふーん、複雑な環境なのね」

「凛子先輩、こそどうなんですか？」

「私? 私はもうヒシンブルに生きてこらね

「よく分からぬですけど」

「やうね、ただ一つ目的が有れば後はどうでも良いのよ」

「けつこうドライなんですね……知つてましたけど」

「そんな性格ならあんな映画見ない。見てもつまらない」としか言え
ないと思つ

「…………」

「それよりほら、夕焼けが綺麗ね」

「あ、ホントだ」

「君にバイオリンを教えて楽しかったよ、……あり」「こっち
の台詞です」

その次の台詞は僕が言いたかった。だから先輩が言つ前に、言つた。

「ありがとうございました」

夕焼けに染まる駅が見えて、先輩が、少しだけ震えた。
僕が振り返って、先輩は自転車をゆっくりと降りる。

「また弾いてね。私のあげたバイオリン、弾いてあげてね」

僕が頷いて手を振る。先輩も笑顔で手を振つて、駅前の人混みに紛れて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6298h/>

メロディ・ライン

2011年1月27日08時41分発行